

# In Her Shoes——山口ヨシ子先生のまなざし

山口ヨシ子先生が研究をとおしてアメリカに向けるまなざしは、大国の繁栄の陰で、生き延びるために日々もがき苦しむ人々への、深い共感をたたえている。この、他者の立場に身を置いてみると——英語の慣用句で“to put oneself in someone's shoes”という——が、山口先生の研究と教育活動を貫く姿勢であったと感じる。

山口先生は、研究対象に一般的な価値基準を当てはめて優劣をつけることはせず、ある種の文学作品がどのような立場の人々にどのように読まれ、役立っていたのかを、当時のアメリカ社会の実相と照らし合わせながら、資料の検証をひとつひとつ丹念に積み上げていくことで考察し、これまで光を当てられることのなかった社会の底辺に生きる人々の生きざまや思いを、現実の厚みと温かみを持ってあざやかに浮かび上がらせる。その過程で明らかにされるのは、文学という文化的創造物が、あらゆる階層の人々にとって文字どおり生きる糧となってきたという事実、つまり文学の真に民主的な社会的意義である。

そのようなまなざしをもっともよく映す先生の著書のひとつに、2015年に刊行された『ワーキングガールのアメリカ——大衆恋愛小説の文化学』がある。19世紀後半のアメリカで、不当に安い賃金で過酷な長時間労働に従事させられた若い女性たちがこぞって読みふけった、いわゆる文学的な価値観からすると「ゴミのような」メロドラマ調の大衆恋愛小説に焦点を当てた本書では、当時のワーキングガールの日常をさまざまな角度から生き生きと再構築することで、貧しいヒロインが苦難を経て金持ちの

男性と結婚するというお決まりのパターンを踏むシンデレラ物語が、彼女たちにとって単なる娯楽を超えた心のよすがとなっていたという内的現実に、境遇の異なる私たち読者が思いを馳せる——put ourselves in their shoes——ができるような形で細やかに説きおこされる。

山口先生が、長年取り組んでこられたアメリカ文学史の盲点を補う数々の重要な研究のなかで、ジェンダーや人種や階級による差別によって社会の隅に追いやられた人々に向けるまなざしは、彼らの目線と同じ高さに据えられている。他者の視点から世界を眺めるために必要な想像力と分析力、そして忍耐力を、長年の研究と教育をとおして培ってこられた山口先生に、心からの敬意を表し、そのような稀有な研究者の姿勢に同僚として身近に接することができた幸運に、感謝している。山口先生の研究の根底にある、温かく、かつ透徹したまなざしは、異質なものに対する不寛容をいかに乗り越えるかが問題となっている現代社会で、ますます必要とされている。